

狗子無仏性の話をめぐって

平野宗浄

現代日本の禅思想を研究しようとする場合、まず文献的素材となるのは公案である。しかし現在専門道場の室内で扱っている公案を、そのまま資料として公開の場に発表することは決して良いこととはいわれぬ。といっても過去において大正五年、『現代相似禅評論』という書名で既に公案禅の一部が暴露されている。だからそれを資料として現代の臨済禅思想の研究を展開すればよいと思うのであるが、今まで殆んど誰も手を着けようとはしなかった。それは何故か、これは筆者の推論であるが、白隠以来の公案禅の一部が今まだある程度生きており、それを犯してはならないという宗教的な良心のようなものが、そうさせているのではあるまいか。現在の臨済禅における公案体系は、それのみでは禅にならないのである。即ち専門道場のきびしい生活体験と相俟って始めて価値が生ずるのである。だからといって現在の公案体系が何の反省もされず、今までのままで良いわけではない。実際は真面目な師家方によって公案体系の全面的な見直し、大改革をしていただきたいと思っている。ただ筆者には全面的な検討をする力量は到底ないのでその基礎的な一部分に問題提起を試みたいのである。

二

筆者はかつて『公案禪の諸問題』と題する論文を発表し、現代の公案禪を弁護したことがある。しかし論理的にあまり明晰とはいいい難いうしろめたさと共に、『無門関』第一則「狗子無仏性の話」に関して特に歯切れの悪さに後悔を残してきた。その最も大きな原因は「狗子無仏性の話」には、元來趙州和尚によって禪の本質的なものが語られている事実と、それが宋代になって接化の手段、修行者を導く方便、方法論として利用されてきた事実とが混同されている現状を明確にしなかったことにある。『無門関』には江戸時代の注釈書や明治から現代まで多くの提唱本が見られるが、このことに言及している人は皆無である。唯わずかに我が大学時代の恩師、故坂本静一氏のみが「禪哲学講義」でその事を論じられているので筆者のノートから掲出してみたい。

……そこでこうした無字の公案の背景ともなるべき有無の問答を止揚して「趙州云く無」で無字を祇麼に^し挙げよとして、有無を絶する無を手に入れるのが禪門の全提正令としたのであり、『無門関』の著者は自分が無字に参じた経験からこれを著書の第一則としたにすぎない。既に無門慧開以前から有無の問答を省略して無の一字を提示していたわけである。そこでこの公案の目指すところは、学人をして無に一切の手係りをもたせないことである。無を思惟の対象とさせないことである。既にこれを思惟の対象とせず、しかも只麼に^し挙げよというからには学人の前に残された一途は、世間でよくいう「無に成りきる」ことしかない。学人は「無—つ」「無—つ」とこの無の一念について精神を集中させる。無字はいわば精神統一の方法となった。精神の統一はむつかしいけれども、不可能ではない。万事を放擲して十二時中、無字を挙していれば、必ずや無と一枚の無になりきった経験は誰にでも生ずるものである。無字はいわば禪定の役目を果すもので、そこで禪門ではいつの間にか無字が劈頭、学人に課せられる習慣となったのも無理はない。……この意味に於て無字の公案はあまりにも有名であるが、それはどこまでも

禪・定的・意味に於てである。無字になりきり乾坤只だ無の一字となった境地、無概念の境地に誘導することは比較的容易でも、その境地の中に於て働き出るもの、即ちその自性を覚知するのなれば見性は成就しない。……………

近來無字を透過せりと称する者が、無字と一枚の経験を得たというに過ぎないことは、そこから働き出る自性の覚知を欠き、従つて表現されるわがものとしての語がなく、単に數百年來踏習した無意味の語を出し、自己が無と同体なることを説明するばかりで、これで公案は透過したりと許されても遂に新自我に懂着することなく、また新風光に接することもない。そこに無字の公案のいわば限界があるといえる。

この講義は公案というのが主題になっていたので、「趙州無字」の原典である『趙州語録』における「狗子無仏性の話」についての詳細な考察がされなかったのは残念であった。しかし公案としての「狗子無仏性の話」には限界が当来していることを明確に指示された功績は大きい。この方便化した「狗子無仏性」の公案を臨濟宗の中で古來誰も批判しなかったわけではない。「狗子無仏性」の話が公案化された初期の頃で、また最も盛んであったと思われる一〇〇年代の中國で既に批判が出ているが、この事については後述する。

三

筆者がこの論文で主張したい要点は、原典の『趙州語録』における「狗子無仏性の話」と、『無門関』第一則に代表されるような、いわゆる公案化された「狗子無仏性の話」は全く相違するということである。従來この相違を明確にしなかったために、まず『無門関』第一則の解釈をふまえて『趙州語録』を理解しようとする間違いを人々は犯して來たし、更に「有でもなければ無でもない無」という固定觀念を造り上げ、そこからすべての古則、問答商量を推理しようとする最も良くない態度が出てくるのである。ともあれ、まず『趙州語録』⁽⁶⁾を正しく理解しようとする努力から始めなければならぬ。

問、犬子還有仏性也無。師云、無。学云、上至諸仏、下至蟻子、皆有仏性。犬子為什麼無。師云、為伊有業識性在。問う、「犬子に還つて仏性有りや」師云く、「無し」学云く、「上は諸仏に至り下は蟻子に至るまで、皆な仏性あり。犬子に什麼としてか無き」師云く、「伊に業識性の有る在るが為なり」

これが『趙州語録』における「犬子無仏性の話」の全文である。これ以前に馬祖下の興善惟寛(755-817)が犬子仏性の問答をしており、以後には宏智正覚(1091-1157)の広録に趙州犬子無仏性の話に有仏性が加えられるが、これらについては後述することにして、今はあくまで趙州從諗(778-897)の残した言葉として最も信用度の高い『趙州語録』に掲載されている文から考察することにした。

まず基本的な問題から入ってゆくが、「犬子に還つて仏性ありや」という僧の質問に対して趙州の答えた「無し」は「無し」であつて、有無を超えた「無」ではないということである。この有無を超えた「無の一字」という捉え方は恐らく五祖法演(711-804)に始まり、大慧宗杲(1089-1163)に至つて最もその隆盛を見るが、無門慧開(1183-1260)の著『無門関』が開板されてからは、「無の一字」のみを特別扱いをする見方が随分固定化せられたようである。しかし『趙州語録』におけるこの話を読む限りに於ては、僧が「犬子に仏性があるか」という質問に「無い」と答えたのであり、「有るか」に対する「無い」である。だからこそ僧の次の質問が出てくるのである。「上は諸仏から下はアリに至るまで、すべて仏性があります。犬にはどうして無いのですか」若し趙州の「無」が、有無を超えた「無」であるならば、僧の次の質問が出てくることはないし、またその僧の質問に対する次の趙州の答え、「彼に業識性があるからだ」もあり得ない。だからこそ『無門関』では「無字」以下を切り捨てたのだといえる。

次にこの話を読んで当然起ってくる疑問がある。それは人間自身が根本の問題である筈の宗教問題に、何故犬が話題になったのかという事である。たまたまそこに犬が居合わせたからという様な簡単な理由では決してない。趙州やその師の南泉普願（七四八—八三四）の語録をしっかりと読んでいけば、その中で動物が出て来た時は、決ずといって良い程、それは異類中行に關係している事に気が付く筈である。従って異類中行という事は、南泉、趙州の両語録を通じて際立った特徴の一つといえる。異類中行というのは難解の語であるが、曹山本寂（八四〇—九〇一）がその語録の中で「四種異類」といい、異類中行を四つに分類などしてから必要以上に難解になった感がある。まず『南泉語要』では

此物不是凡聖、不是愚智、強喚作愚智。本不是名字、不得道著、道著則頭角生、喚作如如早是變。兄弟直須向異類中行始得、大難大難。

此の物は是れ凡聖にあらず、是れ愚智にあらず、強いて喚んで愚智と作すのみ。本と是れ名字にあらず、道著することを得ず、道著せば則ち頭角生ず、喚んで如如と作せば早く是れ變ぜり。兄弟、直に須らく異類中に行いて始めて得べし。大いに難し大いに難し。

異類というのは四つ足の動物をいう。だから一応文字の上では異類中行とは動物の中に行くということで、結局は動物になるということである。そして四つ足の動物に人間がなるということは、人間が死んで輪廻転生し、来生で畜生に生れ変るということで、古来印度から仏教に至るまでの思想が深く浸透していることは周知の事実である。しかし人間が前生の業、あるいは現生の業によって六道輪廻するという思想は、現代の日本人の感覚からはあまりにもかけ離れているので、仏教を学ぶ人々にもこの事を忘れがちである。対象が禅の場合はなおさらである。元來禅だけ

は輪廻転生と無縁であった筈が、そうすっきりとはなかなかにしていない。唐代の禪語録(6)を読めば、この事は考察される。これらの詳細についてはいずれ稿を改める予定である。

とにかく当時の仏教の目的、あるいは禪の目的は何であったのか、その第一は六道輪廻からまぬがれることであつた。昔の求道者がきびしい戒律を守り得たのは、それによって恐しい六道輪廻から救われるという信仰があつたからである。出家という事がまず其処から出発したのであつた。しかし南泉は輪廻をまぬがれようとするから自由がないのだ、自ら輪廻に飛び込めというのである。『景德伝燈録』南泉章に次の如く見られる。

第一座問、和尚百年後向什麼處去。師云、山下作一頭水牯牛去。僧云、某甲随和尚去還得也無。師云、汝若随我、即須銜取一茎草來。

第一座問う、「和尚百年後、什麼(いずれ)の處にか去る」師云く、「山下の一頭の水牯牛(すいこぎう)と作り去らん」僧云く、「某甲、和尚に随い去らんに還つて得んや」師云く、汝若し我れに随わば、即ち須らく一茎草を銜取し來るべし」

すべての仏教徒から恐れられていた輪廻転生に、このように真つ向からぶつかつてゆき、かえつて輪廻思想を棄つてしまつたような商量は、おそらく南泉が始めてではなからうか。そしてこの禪風は趙州にしっかりと受けつがれる。その繼承的な商量が「南泉斬猫の話(6)」であると筆者は理解する。

五

このような背景から自然に導き出されることは、趙州の会下では輪廻転生をどのように突破するかが大問題となつていたので相違ないということである。趙州に「狗子に仏性ありや」とたずねた僧は、若し自分が現生の業によつて來生犬に生れ變つたらどうなるのか、という切実な問題をかかえていたのに相違ない。そうでなければ真劍な禪の問答に、犬の事など問題にする筈がない。しかし質問者である僧には南泉や趙州の高度な異類中行という精神を未だ理

解していなかった。即ち若し犬に仏性があるならば、自分がたとい輪廻転生して犬に生れ変わったとしても成仏出来るではないかと云う期待を持っていたといえる。それなればこそ趙州の「無し」という答えは、そういう甘えを厳しく断ち切ったものであり、「有り」に対する「無し」でなければならぬ。しかし僧の甘えは未だつづく。『涅槃經』によれば犬に仏性がある筈ではないかと迫る。趙州はそんなことは疾く承知である。經典というものは、どうすれば六道輪廻から救われるかという大宣伝を連ねたものであり、異類中行は敢えてそれに逆らうのである。そこで趙州は再びその僧を突きはなす。犬は(四つ足の動物はすべて)前生の業によって犬になったのであるから仏性など無いのだというのである。

趙州の答えの「業識性」という言葉を従来「惜しい、欲しい、憎い、かわいいなどという迷いの性質」などという注釈が見られるが、ここではそういう軽い意味ではない。⁹⁾南泉、趙州の異類中行の精神を背景にこの問答を考える時、「業識性」は絶対に浮かばれない、救われまいという恐ろしい業を含んでいるのである。しかし趙州が取り上げた「業識性」は趙州の思想背景があつての上の事である。筆者はそれを大闡提と考える。

問、如何は大闡提底人。師云、老僧答你、還信否。云、和尚重言、那敢不信。師云、覓箇闡提人難得。(『趙州語録』)

問う、「如何なるか是れ大闡提の人」師云く、「老僧、你に答えん、還って信ずるや」云く、「和尚、重ねていう、那般ぞ敢えて信ぜざる」師云く、「箇の闡提人を覓むるに得難し」

この闡提人という言葉はまた難解である。簡単にいえば「成仏しない人」ということであるが、その「成仏しない人」といっても、極悪人で成仏出来ない人の場合と、一切衆生が成仏するまでみずから成仏しないという菩薩の場合と二通り考えられるが、ここではそのどちらでもないように思う。ただ自(みづか)ら積極的に「成仏しない」という方向に相違ない。曹山本寂が「如何なるか是れ大闡提の人」という問に「業を懼れず」と答えているが、この「業を懼れず」を大変高い意味でとらえたものが趙州の大闡提人であると筆者は受け取る。故に趙州が「狗子無仏性の話」の中で更

に一つ云わんとしていることが読み取れる筈である。それは若し質問者の僧が、南泉のいう異類中行を念頭に置いて質問しているのであれば、若し自から進んで犬に輪廻転生しようとするならば（異類中行を實踐しようとするならば）どこかでいつか成仏できるであろうという希望、甘えを一切捨て去らねばならぬといっているのである。

六

『無門関』第一則の公案を透過した者は、次に「業識性」の公案化されたものを課せられ、続いて「狗子有佛性の話」の公案を課せられる。これらは白隠下の公案体系に組み込まれてはいるが、今日の臨済宗の公案禪としては「趙州狗子有佛性の話」は「狗子無佛性の話」に次いで二次的なテキスト扱いを受けている。このことの良し悪しは別として、この二つの「話」の歴史的経緯を考察してみるべき必要がある。「趙州狗子有佛性の話」が問答形態の型を整えて文章となった最も古い出典としては『宏智広録』の小參と頌古に見られるものがある。

僧問趙州、狗子還有佛性也無。州云、有。僧云、為甚撞入者箇皮袋。州云、為他知而故犯。又僧問、狗子還有佛性也無。州云、無。僧云、一切衆生皆有佛性、為甚狗子却無。州云、為他有業識在。

僧、趙州に問う、「狗子に還つて佛性有りや」州云く、「有り」僧云く、「甚んとしか者箇の皮袋に撞入する」州云く、他、知つて故に犯すが為なり」又た僧問う、「狗子に還つて佛性有りや」州云く、「無し」僧云く、「一切衆生、皆佛性有り、甚んとしか狗子に却つて無きや」州云く、他に業識有る在るが為なり」

ここで「狗子有佛性の話」が真に趙州の言葉であつたとすれば、この話はやはり異類中行を背景として成り立っていると筆者は考える。ただし趙州が「無し」といった同じ次元でこの「有り」があるのではないと思う。あまりにもうまく整い過ぎるので妙だとは思われるが、「知つて故に犯す」というのは、明らかに自から輪廻転生の中に飛び込んでゆく異類中行である。だから逆にいうと異類中行の實踐でなつた動物ならば、それは佛性があり、（たとえ

ば南泉や潯山の水牯牛など) そうではなく、消極的に業に引きずられて輪廻転生した動物には仏性がない、ということになる。筆者のこの理解は「趙州狗子の話」が公案化される以前のものであるが、「狗子有仏性の話」が付加されているかいかで宗派の禅風の個性もまた相違していることを指摘してみたい。

「趙州狗子有仏性の話」が完備したテキストとして最も古い出典が『宏智広録』であることは前述したが、この「話」が断片的な形で見られるのもう少し遡る。「禅門拈頌集」の「趙州狗子仏性の話」については『宏智広録』と同じテキストが見られるが、その章に広靈希祖の上堂が掲げられ、修山主の問答が引かれてそれに「州云く有」と「知而故犯」が見られる。この修山主という人は龍濟紹修といい、羅漢桂琛の法嗣であるから法眼文益と法の兄弟になる。この資料が信用出来るものとすれば、西暦九百年前後には「趙州狗子有仏性の話」があった事になる。また同じ『禅門拈頌集』には投子義青下の大洪報恩(一〇五八—一一一一)の頌古があり、頌の内容から見ると「有仏性、無仏性」をふまえている。宏智より約四十年先輩になる。「禅門拈頌集」ではその他、智海本逸、円通法秀、本覚守一がそれぞれ「有仏性、無仏性」にわたって頌古を作っているが、これらは雲門宗である。そして「無仏性」のみの頌古は真浄克文、五祖法演、大慧宗杲、無示介謙、密庵咸傑、等で臨済宗に属する。今記述したものは『禅門拈頌集』に掲載せられているもののみであるが、それでも明らかに禅風の分離が見られる。即ち「有仏性・無仏性」をふまえているのが曹洞宗・雲門宗つまり青原系の人々であり、(大愚守芝のみは例外)「無仏性」のみを題しているのが臨済宗の人々である。このほか南宋から元初にかけて臨済宗の系統の語録をしらべてみたが、やはりその殆んどは「無仏性」のみの公案化されたものばかりを扱っている。そしてちようどそれらに最も対立的に「有仏性、無仏性」を完備という形で扱った代表的なものが『宏智広録』の小参、頌古であり、少し年代が下ってそれを引き継ぐのが万松行秀の『従容録』である。

唐代の禅者にはそれぞれの強烈な個性や独自の禅風はあっても、臨済宗とか曹洞宗というように後世みられるよう

な系統的な宗派色というものは殆んどなかったといつてよい。それが宗派的色彩を帯びるようになってくるのは一〇〇〇年代に入ってからである。そしてそれぞれの宗派における修行方法論の相違の論争にまで発展するのは周知の事実であるが、その看話と黙照と要約化される中には、実はこの「趙州狗子の話」の取り扱い方の相違が嚴然として存在するのである。

七

だいたい曹洞宗の系統の禪風には、無字一本槍という工夫の仕方など受け付けぬ體質がある。それに象徴されるのが洞山、曹山の正偏五位の宗旨であろう。その思想の根源は石頭の『參同契』まで遡るかもしれないが、兎に角、正や偏にかたよらず、正と偏が回互不回互しなければいけないという。たとえば臨済の「一無位の真人」という言葉を道元が批判し、「無位の真人」のみでは駄目で「有位の真人」もなければ本ものではないと説く。道元の『正法眼藏』の難解さはこの「偏正回互」の入り組み方の複雑さにある。曹洞系の禪にはそのみではなく曹山の「四種異類」が影響する。これは筆者が「趙州狗子の話」を異類中行から説明しようとする傍証にもなるわけである。

臨済系で「趙州狗子の話」を公案化し、最も宣揚した最初の人はいはやはり五祖法演であろう。ただし法演の場合はテキストには『趙州語録』に准じたものを使用し、「有仏性」はない。『五祖法演禪師語録』には次の如く見られる。

上堂。挙、僧問趙州、狗子還有仏性也無。州云、無。僧云、一切衆生皆有仏性。狗子為什麼却無。州云、為伊有業識在。師云、大衆你諸人、尋常作麼生會。老僧尋常只舉無字便休。你若透得這一箇字、天下人不奈你何、你諸人作麼生透、還有透得徹底麼、有則出來道看。我也不要你道有、也不要你道無、也不要你道不有不無、儻作麼生道。珍重。

上堂。挙す、僧趙州に問う、「狗子に還つて仏性有りや」州云く、「無し」僧云く、「一切衆生、皆な仏性有り、

狗子什麼と為てか無きや」州云く、「伊に業識有る在るが為なり」師云く、「大衆、你諸人、尋常作麼生か会す。

老僧は尋常只だ無字を拏せば便ち休む、你若し這の一箇の字を透得せば、天下の人、你を奈何ともせざらん、你諸人、作麼生か透らん、還って透得徹底するもの有りや、有れば則ち出で来て道い看よ。我れ也たあなたが有と道うを要めず、也たあなたが無と道うを要めず、也たあなたが有ならず無ならずと道うを要めず、你、作麼生か道わん。珍重。」

法演はテキストに一応「業識」を掲載はするが、これを既に重要視していない。「尋常ただ無字を拏す」とか「這一箇の字(無字)を透得せば」とかしきりに「無字」のみを強調する。しかもこの「有でもなく無でもなく不有無でもない」という見方は、後の大慧や無門などの無字観の根源をなしているといえる。

大慧宗杲は、その著『正法眼蔵』の中、一箇所にのみ、『趙州語録』から「業識有る在り」を引用しているが、それ以外の『大慧語録』『大慧書』にはすべて「無字」の一本槍であり、その大量の引用に拘わらず、「業識」は勿論「有仏性」の影もない。この宗風が後の無門慧開の『無門関』にあたえた影響は絶大なものがある。その一例を『大慧語録』の法語から引用してみたい。

僧問趙州狗子還有仏性也無。州云、無。只這一字、便是斷生死路頭底刀子也。妄念起時、但拏箇無字、拏來拏去、羈地絶消息、便是歸家穩坐處也、此外別無奇特。

僧趙州に問う、「狗子に還って仏性有りや。」州云く、「無し」只だ這の一字、便ち生死の路頭を断つ底の刀子なり。妄念起る時、但だ箇の無字のみを拏せ、拏し来り拏り去って羈地に消息を絶てば、便ち是れ歸家穩坐の処なり、此の外に別に奇特なし。

この調子で『大慧語録』と『大慧書』合せて「狗子無仏性」が四十五回も出てくる。

しかしここで不思議に思うのは、五祖法演を師とし、大慧宗杲を法嗣にした円悟克勤(一〇六三—一一三五)には、その『円悟語録』や『碧巖録』には「趙州狗子の話が全く見られぬことである。我々の日本臨濟禪の源流である楊岐

方会（九九二—一〇四九）の系統は、皮肉なことに我が宗峰妙超に至るまで「趙州狗子の話」に縁が極めて薄い。同じ円悟下でも我々の正系になる虎丘紹隆（一〇七七一—一三六）の語録には全く見られぬし、その法嗣、応庵曇華（一一〇三—一一六三）には大慧批判の語が見られる。

上堂。僧問、大慧禪師道、無之一字、是斷生死刀子、還端的也無。師云、恁麼說話、未夢見趙州在。

上堂。僧問う、大慧禪師道く、「無の一字是れ生死を断つ刀子」と、還って端的なりや。師云く、「恁麼の說話、未だ夢にも趙州を見ざるなり」

これは大慧の「趙州狗子の話」の用い方、利用の仕方に対する痛烈な批判であるが「無字」のみを摘出した公案方には大慧下五世の笑隱大訥（一二八四—一三四四）までその語録中に批判を加えている。

密庵、松源、運庵とそれぞれの語録にも「趙州狗子の話」の取り上げ方は極めて少く、虚堂智愚（一一八五—一二六九）もただ一回、それも五祖法演の法語として少し紹介的に掲載しているに過ぎない。そしてその法嗣である南浦紹明（一二三五—一三〇八）には全く見られない。さていよいよ応燈関の中心である宗峰妙超（一二八二—一三三七）であるが、彼に強く影響をあたえた雲門文偃（八六四—九九九）と雪竇重顕（九八〇—一〇五二）の各語録には「趙州狗子の話」が見られず、また次に影響をあたえたと見られる『碧岩録』『虚堂録』『大応録』にもそういう家風が見られないが、宗峰妙超の語録である『大燈語録』にはめずらしく『趙州語録』からの「無仏性の話」が上堂に見られ、また大燈が撰んだ公案集『大燈百二十則』にもその第六則にやはり『趙州語録』から引用されたものとして採択せられているが、その下語等から推察すると、大燈のそれは大慧や無門のものとは家風が違う。たとえば『大燈語録』で「……趙州云く無し。此の意如何」という質問に「鬪體裏を穿過す」と答えており、異類中行からの見方に近いものであることは注目すべきことであろう。

このように「趙州狗子の話」の歴史的変遷、また日本臨濟禪に至る背景を考察してみると、白隠以後の「趙州狗子

の話」は、大慧と無門まで飛び越えて行くようである。そして『葛藤集』などによれば、『無門関』の無字に「業識性」と「有仏性の話」を後へくっつけて形だけ如何にも整えたという感じがする。それは『無門関』の無が、有無の無ではないのだという事を証したい、或いは強調したいが為の小細工の様な気がする。それは白隠以後の室内（何処の室内かは不明であるが）を暴露した『現代相似禅評論』の見解を見れば明らかである。

八

以上によって「趙州狗子の話」に関する考察を試みたのであるが、その中、若干気がかりな問題が残っている。それは『宏智広録』に見られる「趙州有仏性の話」は果して趙州の真説であったかどうかという事である。その資料的経緯を今一度まとめてみると、まず趙州の語録の最も古いテキストとしては『祖堂集』があるが、その趙州章には「狗子仏性の話」がなく、『景德伝燈録』にもない。なんといっても趙州のこの話としては『古尊宿語要』が最も古く、『古尊宿語録』にも同文で掲載される。続いて『聯燈会要』『五燈会元』に見られるが、『宏智語録』の内容の時代としてはほしい『趙州語録』が出来上る頃と重なる。「趙州有仏性の話」が『宏智語録』と『従容録』にのみ見られ、『趙州語録』には勿論、五燈の各燈史にも見られぬことは、少し異常さを感じないわけにはゆかぬ。『趙州語録』のテキストから大慧や無門の系統には「業識性」の語が抜かれ、逆に宏智の系統には「有仏性」が加えられていると見られても仕方がないような状況が推察されるのである。『趙州語録』における「狗子無仏性の話」をよく熟読すれば、これ以上に加える必要はないが、しかし「業識性」を抜き取っては決してならないと筆者は思うのである。

注

- (1) 拙著『大燈禪の探求』第一章第三節、一九〇頁。この時の筆者の発想は、日本臨濟禪を『無門関』第一則「無字の

公案」のみで推察されては困るという立場からであり、その「無字の公案」も「無」だけではないと現在の公案禪を弁護しているが、残念ながら『趙州狗子の話』の掘り下げ

方が極めて甘い。

- (2) 『趙州語録』の最も古いテキストとしては福州鼓山の頤藏主が刊行した『古尊宿語要』の中の「趙州真際禪師語録」であろう。今回は『無著道忠校写古尊宿語要』より引用した。臨濟禪の室内で今日挙掲せられる『無門関』の「無字の公案」では、趙州の無ではなく、一般化された無、あるいは修行者個々の無として取り扱っているが、今はそういう公案化した話ではなく、あくまでオーソドックスな、古典を讀む立場で、即ちあくまで「趙州の狗子無仏性の話」として取り扱ってゆく。

- (3) 『景德伝燈録』卷七（台湾本一二七頁）興善惟寛（七五五—八一七）章

問、狗子還有仏性否。師云、有。僧云、和尚還有否。師云、我無。僧云、一切衆生皆有仏性、和尚因何独無。師云、我非一切衆生。僧云、既非衆生、是仏否。師云、不是仏。僧云、究竟是何物。師云、亦不是物。僧云、可見可思否。師云、思之不及、議之不得、故云不可思議。

惟寛の「狗子仏性の話」は趙州のそれとはやはり随分趣が違ふ。この場合、狗子有仏性は、出発点が一切衆生皆有仏性に立ってスタートが比較的平凡である。そして「我無」から始めて禅的になるが、これも「無し」であって「無」（有無を超えた無）ではない。しかし結局、不是心、不是仏、不是物の師の馬祖禪へと帰入してゆく、最終的には「不可思議」という面白くない表現法をとり、趙州の家風

に比較すれば個性にとほしい。

- (4) 大正大藏経第四十七卷、五三四頁b五四三頁bまた、同、五三三頁c五四二頁の三種墮、三等之墮の各項も異類中行を扱っている。三種墮とは、「水牯牛。不受食。不断声色」をいい、四種異類とは、「往来異類。菩薩同異類。沙門異類。宗門中異類」をいう。

曹山は南泉の有名な異類中行の話以外に、「滄山曰く、我れ百年後、一頭の水牯牛と作り、左脇の上に滄山僧某甲の一行字を書かん。汝道え、当に之を見る時、喚んで甚麼と作さん」という話、「祖仏、有を知らず、狸奴白牯、却って有を知る、什麼と為てか狸奴白牯却って有を知る」という話、あるいは「披毛戴角」「頭長三尺頸短二寸」等の句を集め、異類中行を体系化しようとした。これはかえって良くなかったと思うが、異類中行に注目したことの功績は大きい。

- (5) 鼓山本『古尊宿語要』無著道忠校写本、十二丁参照。

昔と今では禅といえども、その求道の動機、根源に於て随分差があることを認識すべきである。現在の日本人で六道輪廻からまぬがれたいという動機で禅の道に入る修行者は殆んどいないのではなからうか。しかし、唐代ではそれが常識であったのである。たとえば『臨濟録』を例にとってみても、

「錯ること莫れ、諸禅徳、此の時遇わずんば、万劫千生、三界に輪廻し、好境に徇って扱し去って驢牛の肚裏に生ぜ

ん」

「所以に三界に輪廻して、種種の苦を受く」

「是の如きの流、尽く須らく債を抵して、閻老の前に向つて、熱鉄丸を吞むこと、日有るべし」

「未だ得ざれば依前として五道に輪廻す」

「舟、懸河に似たるも、皆な是れ造地獄の業のみ」

これらの臨済の語を見て、現代人は現代感覚から、臨済は方便を使つておどかしたただけだと解釈し勝ちであるが、そのような軽い気分で読むものではないと筆者は思う。当時の人々が輪廻転生を実際にどんなに恐れていたかを真正面からとらえる必要があるのではなからうか。そうでなければ異類中行の精神はわからないと思う。

(7) このこの処は「百丈野狐の話」を参照したい。「百丈野狐の話」は「百丈広録」には見られず、「景德伝燈録」にもない。最も古いと思われる出典は「天聖広燈録」であるが、「趙州無字」と同じく「無門関」に掲載せられて有名になった。筆者は「百丈野狐の話」を従来の提唱の解釈とは意見を異にし、「趙州狗子の話」と同様、異類中行の公案と考へる。前生の業で五百生野狐に堕ちたという話の根源はやはり輪廻転生説より成立つており、前注でいったように、この事を抜きにしてこの話を読むことは出来まい。この話の中心は不落因果、不昧因果にあることは当然であるが、従来の伝統解釈のように「不落因果も不昧因果も変らぬ、それを違ふように解釈するのは理に落ちたことになる」と

すれば、この折角の貴重な話も、「趙州狗子の話」の伝統解釈「有でもなければ無でもない有無を超越した無」と同じパターンとなり終る。たとえば「現代相似禪評論」では、不落因果、不昧因果の答として「不落因果コン／＼不昧因果ワン／＼（不落不昧大した相違のないものという意也）」と見られるが、これで室内が通るなら、この話を公案にして欲しくない。

不落因果の場合は輪廻転生説の常識的な立場から、輪廻しないように、輪廻を恐れて、輪廻から逃れようとして修行し、悟ろうとした態度を示しているといえよう。これは従来の伝統仏教のとつて来た立場であり、なんの不思議もない筈で、これで真面目に修行して来た僧が野狐に転生したことがむしろ不思議なぐらいであろう。しかし禪からすれば、それは当然ということになる。禪、なかんずく異類中行からすれば、輪廻から逃れようとせず、むしろ自から輪廻に飛び込み、自から野狐になつて野狐に安住するならば、輪廻が輪廻でなくなり、野狐は野狐でなくなる。これが不落因果であつて不落因果とは歴然たる相違があるのである。その不落因果であろうとするにはどうすればよいかというのがこの公案の意図する処であつて、不落も不昧も変らなければこの話の意義は全くないといつてよい。

(8) 「南泉斬猫の話」も従来の提唱本の解釈では全くなくなくしがたい。猫を斬ることを恐しさをもつと真剣に考えなければならぬのではないか。殺生戒を敢えて犯すことの深

張感を現実になんとか把握すべきではないか。この話も室内の公案解釈ではわかるものではない。これもいづれ稿を改めて論究したい。

(9) 業識というのは有情流転の根本識であるという。「忙忙たる業識」という語が「祖堂集」の仰山章に見られ、道元は「永平広録」の上堂で「云く、但だ看る業識ただ茫茫たるを、一切衆生、無仏性、下座」といつている。

(10) 大正大藏経、第四十七卷五三〇頁c。参照。

(11) 白隠以降、現在まで実践されている公案禪では大体本則に「兩掌相拍って声あり、隻手に何の声かある」か「趙州因に僧問う、狗子に還って仏性有りや、州云く無し」が初関として出題され、それが透過すると、拶所といつて、その初関透過の力量を試めず公案がある。たとえば「無と云わずに何という」「無と有とを分けよ」「無と有とどれだけ隔たる」「無字の姿をいうてみよ」などがあり、その拶所の中に「業識性」や「趙州狗子有仏性の話」などが組み込まれている。

(12) 大正大藏経、第四十八卷一七頁b。同二〇頁a参照。

(13) 「禪門拈頌集」雪峰鶴夢、懸吐本、「四一五」二四二頁a～二四三頁b。参照。

(14) 広靈祖上堂。挙此話、至有業識在。師云、此箇公案、叢林批判甚多。或云、狗子討甚仏性、問者無仏性。或云、是冷語対伊。或乃展開兩手。又有僧問修山主、狗子還有仏性也無。主云、有至知而故犯。……

(15) 大洪恩頌、有有有路上、有花兼有酒。一程分作十程行、坐看南星懸北斗。

又頌、無無無匣中、無劍又無書。三入洛陽人不識、翻身飛過洞庭湖。

又頌、有復無復有、百年妖恠虛開口。一句當風震若雷、井蛙半夜同哮吼。

又頌、無復有有復無、何事人來訪子湖。千里同風無足道、一條杖子兩人扶。

(16) 薦福逸頌、有仏性無仏性、正却倒却正。踏破澄潭月、拗折無星秤。火向水中燃、檝從空裏釘。背類盲龜醫死蛇、一對牙関緊敲定。

(17) 保寧秀頌、少年学解昧宗途、老倒依還滯有無。古仏純金誰弁色、惑為機智踳躅。莫躊躇、話有談無須是渠。

(18) 法真一頌、狗子仏性無、狗子仏性有。從來只向兩頭走、未能一鏃破雙関、業識依前還作狗。

(19) 真淨文頌、言有業識在、誰云意不深。海枯終見底、人死不知心。

(20) 白雲演頌、趙州露刃劍、寒霜光焰焰。更擬問如何、分身作兩段。

(21) 徑山杲頌、有問狗仏性、趙州答曰無。言下滅胡族、猶為不丈夫。

(22) 育王謙頌、千尋浪底魚生角、万仞崖頭虎嘯風。却笑趙州無仏性、猶能向月吠晴空。

(23) 密庵傑頌、狗子無仏性、殺人便傷命。楚痛百千般、因邪

却打正。

②4 翠巖芝拈、説有説無、両彩一賽。如今作麼生道。

②5 『從容録』第一八則。大正大藏経、第四十八卷、二三八

頁b、c。宏智正覺の頌古は

狗子仏性有、狗子仏性無。直釣元求負命魚、逐氣尋香雲

水客。嘈嘈雜雜作分疎、平展演。大鋪舒、莫怪儂家不慎初。

指点瑕疵還奪壁、秦王不識蘭相如。

②6 道元『正法眼蔵』説心説性の巻。日本思想大系(岩波書店)本、下巻二十二頁

臨済の道取する尽力はわづかに無位真人なりといへども、有位真人をいまだ道取せず。のこれる参学のこれる道取、

いまだ現成せず、未到参徹地というべし。説心説性は説仏

説祖なるがゆへに、耳処に相見し、眼処に相見すべし。

②7 大正大藏経、第四十七卷、六六五頁b、c参照。

②8 大慧『正法眼蔵』巻六、「統蔵経」七十丁a。

②9 大正大藏経、第四十七卷。「大慧語録」

八二七頁c

八五〇頁b

八五一頁c

八六九頁a、c

八七〇頁a

八八六頁a

八九一頁b

八九六頁a

八九九頁a

九〇〇頁b

九〇一頁c

九〇二頁a

九〇三頁c

九〇八頁c

九一一頁a

九一九頁a

九三二頁b

九三三頁a、b、c

九三四頁c

九三八頁b

九三九頁b

九四一頁b、c

九四二頁c

九七六頁b、c

③0 大正大藏経、第四十七卷、九〇三頁c。

③1 応庵曇華語録、「禪宗集成」一五巻、九九六七頁a。

③2 笑隱大訶語録、「禪宗集成」一五巻、一三六六頁a。

③3 大正大藏経、第四十七卷、九九九頁c。

③4 『大燈語録』、大徳寺語録。大正大藏経、第八十一巻一

九八頁b。

記得す、僧趙州に問う、「狗子に還つて仏性有りや」州云く、「無し」此の意如何。師云く、「獨體裏に穿過す」進んで云く、「一切の蠢動含靈、皆な仏性有り、甚んとして

か狗子還つて仏性無きや」州云く、「他に業識性あるが為の故なり。」作麼生か端的を弁せん。師云く、「身を藏して影を露わす」……………。

③5 趙州因僧問、狗子還有仏性也無。〔舌頭己長〕州云無。

〔買鉄得金。又云、逼塞虚空。又云、無孔鉄槌当面擲〕僧云、一切蠢動含靈皆有仏性、為甚狗子還無仏性。〔何不自領去〕州云、為伊有業識性。〔老賊大敗〕